



平成 28 年 10 月 12 日(水)定例会発表要旨

札幌の道づくりと手稲

手稲郷土史研究会 立花 邦雄

1. さっぽろの道づくりの基本は「グリッド構造」

1869 (明治 2) 年 10 月 (旧暦)、開拓使初代判官島義勇は極寒の中札幌市の本府 (中心部) の区画割を決め、東西の基軸を創成川、南北の基軸を現南 1 条通として街づくりを進めていった。

この時京都のまちを参考にしたといわれており、碁盤の目 (グリッド) の道路計画がこの時決まった。1 区画 60 間 (約 100m) 四方の区画割と共に、現在でもこの方式がまちづくりの基本として受け継がれている。



1924 (大正 13) 年には北 3 条通の北海道庁正門前から札幌駅前通間に札幌で初めて木塊舗装による道路舗装が行われた。2011 (平成 23) 年土木学会推奨土木遺産に選定。

大正時代に入り規則正しい区画割も法律の裏付けが必要となり、1919 (大正 8) 年には都市計画法、市街地建築物法が公布され、1922 (大正 11) 年 8 月に市制が施行され名実共に札幌市となった。

1940 (昭和 15) 年には第 5 回冬季オリンピック大会が札幌に決まり開催されるはずであったが、戦争への流れが先行する中、開催決定後わずか 4 ヶ月で返上することになり、幻になってしまったのは誠に残念である。戦後札幌市は急速に人口増加と都市規模が拡大し、団地造成や区画整理が行われた。1972 (昭和 47) 年には悲願の第 11 回札幌冬季オリ



ンピック大会が行われ、数々のドラマが生まれると共に、オリンピック大会に必要な主要道路が、「1 バイパス 1 環状 5 放射」の幹線道路計画の中で優先的に整備され、ゴムタイヤ式地下鉄の開通、地下街のオープンなどと共に街づくりが急速に進んだ。

その後道路整備の長期整備計画は何度か改訂が行われ、最新の骨格道路計画としては「2 高速 3 連携 2 環状 13 放射」が整備ビジョンとなっている。

2. 私の選んだ手稲の歴史ある道路

手稲に歴史を持った道路は数多くあるが、その中で印象に残っている路線をあげてみた。なお路線名が複数なのは、都市計画街路に指定されている区間があるためである。



最新の幹線道路

(1) 追分通（稲積 1 号線・道道札幌北広島環状線）

西区と手稲区の境を通る環状道路で、かつては開拓農道であり、札幌本府がこの地に官園を設けたとき、開拓使がこの地域を流れる川（北発寒幹線大排水）の南側に官有馬の放牧地を造って馬を追い分けたのが語源と言われている。この辺には牧場や農場があちこちにあった。街道の分岐点をも意味する。この道路は札幌の外郭環状として、将来的に非常に重要な性格を秘めている。

(2) 樽川通（樽川線）

手稲区内では古い歴史を持つ通りで 1925（大正 14）年に開削された土功排水（手稲土功川）に沿って真北に延びており、昭和の始め頃には山口地区の農場や新川河口付近にあった小樽内の集落に通じる唯一の道として使われていた。泥炭地盤で軟弱なため雨が降るとぬかるみ車も通れない状況から、付近に自生していたわらびを取りに来る人から入場料を徴収し、その収入で砂利を購入しそれを道路に敷いて通行に供したといわれている。

(3) 下手稲通（下手稲札幌線）

JR 函館本線の南を走る国道 5 号に対し、北側を通り小樽市銭函から札幌市街を結ぶ唯一の片側 2 車線の幹線道路であるが、延長は長く整備にかなりの年数を要した。

(4) 手稲駅裏通線

大正から昭和初期にかけて軽川駅（現手稲駅）から石狩市の花畔（ばんなぐろ）まで馬鉄（軽石軌道）が走った路線で、道道石狩手稲線につながっている。

現在では当時の地名もなくなってしまったが、この道路の起点から鉄道を跨ぐ歩道橋「花畔人道橋」にその名前を残している。

(5) 曲長通（曲長線）

曲長（かねちょう）の名称は、明治 37 年から昭和 13 年まで現在の運転免許試験場付近にあった曲長農場に由来する。現道は非常に曲がりくねった道路。

3. おわりに

手稲がアイヌ語のテイネ・イ（湿地）に由来することはよく知られているが、道路を造成するにあたっては白石区と並んで鉄道以北は非常に金のかかる地域であった。しかし現在立派にインフラ整備がほぼ完了し、人口も定着して住みやすい環境となっている。我々は過去の歴史を大切にしつつ、恵まれたこの環境を末永く守っていききたいものである。



日高山脈を越えて十勝平野の台地とも云える陸別町「道の駅」関寛齋資料館を目指した一行は、苫小牧「**勇武津資料館**」を見学。八王子千人同心の移住者100人(勇払場所に50人、白糠場所に50人)が1800



年に海を渡り北方警備と農耕に従事した半農半士の生活に想いを寄せた。カササギ(秀吉が韓国から連れてきたという)の飛来を背に一路沙流川流域の**平取町立二風谷アイヌ文化博物館・萱野茂二風谷アイヌ資料館**へ、独自の言語や文化を育んできた日本の先住民族の歴史的遺産などを見学。**平取温泉「ゆから」**で昼食(イクラ丼など…)。



車窓の左右に映える広大な樹海の紅葉に車内の歓声は止まず、いつしか日高山脈を超えて眼下の十勝平野を走り鹿追町**神田日勝記念美術館**を見学。また



またびっくり、知る人ぞ知るベニヤ板に下絵なしで「馬・牛・人」の油彩を制作した農民画家「神田日勝」のピカソを連想させるような油彩にショックを受けながら宿泊

先**本別温泉グランドホテル**へ。一汗流して交流会で盛り上がり就寝。



翌日、目的地の陸別町「道の駅」を目指して利別川上流を目指した一行は、樽川農場の資金をつぎ込んだと言う**十勝国斗満の資料館**に到着。



明治35年72歳の寛齋が何故この斗満に入植したのか? 82歳でこの世を去った「謎」? に接 **ふるさと銀河線関寛齋資料館** して寛齋の生涯に触れたような思いであった。 **晩年の寛齋(82歳)**

一行は関農場跡地の高台で、およそ450年前に作られた白い火山灰に覆われた道内最大級の「**ユクエピラチャン跡**」を見学。利別川を下ってバスは帯広市街を目指した。

十勝平野の生い立ち、先住の人びとのくらし、そして農業王国へと発展した十勝の歴史を伝える**帯広百年記念館**で福沢諭吉や二宮尊徳の思想の影響を受けて結成された「晩成社」と依田勉三らの入植、開懇の様子を見学(時間不足で駆け足)。研修の成果を「柳月」で土産に託した一行は、雪と紅葉が車窓を彩る日高山脈を越え「道東自動車道」を疾走、一路札幌へ!

北海道の開拓に夢を託した先人を偲ぶ今年の宿泊研修旅行は定刻手稲区役所で下車、旅を土産に帰宅した。

今回の研修旅行は菅原研究部長が8月に奥様と二人で下見(台風の合間をぬって)「研修旅行のしおり」や施設毎に説明員(現地の学芸員)が手配されており、一味も二味も違う行程に、もう少し時間が許されていたならと思う視察研修だった。

深まり行く北海道の素晴らしい研修旅行を企画・実施して頂き、あらためて参加者一同感謝申し上げます。ありがとうございました!! とても楽しい旅でした。(記:佐々木)

馬鉄研究会 九月例会報告

＜北海道開拓の村＞ 研修

2016年9月29日

参加：谷川、釣本、乙黒、後藤、沖田、村元、齋藤、大沼、成田、濱埜、以上10名

この度は、濱埜会員のご紹介により、特別に中島館長より直々のご案内を頂くことになった。館長のご案内は、まず北海道開拓の村の馬車鉄道の位置付けから始まった。この野外博物館では馬鉄が村の中心部を、それも現役の当時のかたちのままの姿で運行されており、全国的に見ても他には岩手県の小岩井農場の模擬の馬鉄しかなく、とても貴重な展示となっていること。開拓の村では2001年には「北海道における軌道—馬車鉄道から路面電車へ」という企画展を開催しており、当時から蓄積された馬鉄の歴史的資料は幕末から明治、大正、昭和の初めまでほとんど全てを網羅しており、重厚にして長大、真に貴重なものである。その企画の中心的役割を果たしてこられたのが中島館長なのである。我々にとっては正に千載一遇の機会となったのは言うまでもない。各展示物に合わせて広がるのご案内は、枝葉にいたるも更に惜しげもなく新しい知の引き出しが開けられてとどまるどころがありません。

エピソードもおもしろい。日本初の馬鉄、茅沼炭鉱の“牛鉄”は石炭と牛をのせて港まで坂道を下り、帰りは牛が炭車を引いて帰る、という使われ方であった。

道産馬誕生秘話もある。鯨漁の為に南部から、やんしゅうと一緒に連れてこられた南部馬が漁が終わると捨てられた。何代にも亘り厳しい北海道の気候になじむ中で、現在の特徴をそなえた和種馬、道産馬になったというものであった。更に進むと明治10年に出来た開拓使工業局庁舎があり、そこでは水力動力の木挽工場、蒸気を使って馬櫓を作る工場などが広がり、ここで西洋式の技術を身に付けた人々が、どんどん民間に入り自立していったことを知った。改めて全体マップを見てみると、この野外博物館は全てが何らかの形で馬、木材関連の展示であり開拓当時の人間社会がいかに馬力、木材頼りであったかを痛感した。

最後は皆で馬鉄に乗り“りき”に引かれて札幌停車場へ戻ったが、館長のご案内は予定を遥かにこえて3時間をまわり、市民カレッジで使った全データまでお土産に頂戴してしまった。このデータは正に馬鉄資料のフルコースであり、館長のご厚意に大感激となった。

次回の定例会予定
平成28年12月14日(水)
「惑星と手稲鉱山」
北大理学部大学院惑星科学
科、日本火星探査チーム
所属 松岡 亮 様
会場:手稲区民センター3F

中島館長におかれましては、我々の馬鉄への思いを、更に深く広く掘り下げていただき、開拓の村再発見となる研修会を実現していただきました。参加者一同ここにあらためて心から感謝申し上げます。（文責：沖田）

白石区ふるさと会設立 40 周年

白石郷土館開設記念式典ならびに祝賀会情報

片倉小十郎家ご当主来札の件

《平成 28 年 11 月 26 日(土)》

- 10:15 手稲郷土史研究会出迎え集合(三役・菅原部長)
(茂内会長、一ノ宮、渡部副会長、永井事務局長、菅原研究部長)
- 10:30 白石区ふるさと会武藤征一会長(ほか 10 名)来館
- 10:55 ご当主来館(約 30 分見学) *終了後ホテルニュー大谷へ
- 14:00 白石郷土館開設記念式典
式典、記念講演、セレモニー(鉄砲隊実演等)
- ご当主による御揮毫授領式典
武藤征一会長、茂内義雄会長兩名に壇上にて贈られる
 - 当研究会から式典に、茂内会長、斉藤会計部長が出席予定
当日の来館模様など「郷土史ていね」に掲載予定